

継続看護における映像情報提供の効果

Effect of DVD information provided in continuing nursing care

東 6 階病棟

内田亮 角南絵梨佳 鈴木麻那美 中野和美 大久保敏子

〈要旨〉気管切開をしていることでコミュニケーションがスムーズに行えず、また看護師間で看護方法が違うことにストレスを大きく感じる患者が転院するにあたり、書面のサマリーのみでなく、ケアの様子を撮影したDVDを送付することで、継続看護に役に立つのではないかと考え、本研究に取り組んだ。医師、看護師、リハビリスタッフで協力してDVDを作成し、転院前に転院先へDVDを郵送した。患者に関わるスタッフに、患者に関わる前にDVDの視聴を依頼し、ケアを実施後にアンケート調査を実施した。その結果、ケアによっては参考になったものと、参考にならなかったものがあった。患者にとってケアに対するニーズが高く、また患者独特のケアについては、DVDでの情報伝達が効果的であった。しかし、DVDを郵送したことで、異なった環境で全く同じ方法でケアをしなければならぬのかというプレッシャーを与えてしまった。転院先スタッフのプレッシャーにならないように配慮する必要がある。その上で、患者に行っていたケアすべてをDVDで情報提供するのではなく、患者独特のケアや、転院の目的に基づいた内容をDVDとして情報提供することがより効果的であると考えられた。

キーワード：継続看護、ケアのDVD、情報提供

I. はじめに

入院患者が転院する際は看護サマリーを転院先の看護師に送ることで、継続看護を実施している。長期間入院している患者において、看護処置の多い場合や、ADL介助が複雑な場合は、文章によるサマリーのみでは伝達しきれず、継続看護に繋げることができない場合があると考えられる。

そこで、今回対象となる患者は気管切開をしていることでスムーズなコミュニケーションを行うことができず、またこだわりの強い部分があり、看護師間で看護の方法が違うことにストレスを大きく感じてしまう場面が多く見られた。このような患者の場合、転院後に再び看護の内容が変わってしまい、その都度説明しなければならないことにより、強いストレスに繋がってしまうことが考えられる。

文章によるサマリーでは伝達が難しい場面を映像情報として転院先の看護師に提供することによって、ケアが参考になり、患者にとって安心できる継続看護を提供できるのではないかと考え、本研究に取り組んだ。

II. 目的

看護サマリーだけでなく、患者の状態や看護の実施状況を撮影したDVDを転院先の看護師および関係スタッフに提供することにより、転院前に実施されていた看護が転院先のスタッフに伝達され役立てられたか、継続看護における映像情報の効果を明らかにする。

III. 方法

患者、家族、看護師、医師、リハビリスタッフでDVDの内容について検討した。患者が困っていること、不安に思っていること、スタッフがケアの際に気を付けていることなど目的を明確にした上で、文章では伝達しにくい細かな部分をまとめ、シナリオを作成し、そのシナリオに沿って撮影をした。内容の項目は、「ベッド周囲の環境（1分14秒）」「ポータブルトイレの移乗（1分4秒）」「歯磨き介助（2分26秒）」「体位保持の方法（2分38秒）」「嚥下訓練（51秒）」「歩行訓練（19秒）」についての合計8分34秒のDVDを作成した。DVDはケア時に必要な内容のみを短時間で確認できるように、項目毎に分けて作成した。作成したDVDは転院前に転院先へ

送付し、患者に関わる前にDVDの視聴を依頼した。転院1ヶ月後までに転院先の看護師、その他関わった職員へDVD内容が参考になったかアンケート調査した。転院してから1ヶ月後にアンケートを回収し、単純集計した。

IV. 倫理的配慮

研究の目的、方法、期待される結果を研究の依頼書へ記載した。また、①研究への参加は任意であること②研究に参加しない場合でも、不利益を受けないこと③研究への参加に同意した後でも、いつでも同意を撤回できること④得られた個人情報は院外に持ち出さず、研究担当者以外に情報漏洩がないよう厳重に管理すること、以上を研究の依頼書に記載し、転院先にDVDとアンケート用紙とともに郵送した。研究への同意の有無は、アンケート用紙の回収をもって同意と判断した。患者に対しては転院前に病室にて口頭にて上記①～④を説明した。なお、本研究は信州大学医倫理委員会の承認を得て行っている。

V. 結果

作成したDVDは、転院が決定してからDVDの内容の修正を加えたため、郵送は転院の3日前となった。DVDを視聴し、患者に関わったスタッフ17名にアンケート調査を実施し、回収率は

100%であり、職種は全員看護師であった。

アンケートの「DVDの内容は援助方法の参考になりましたか」の設問に対し、ベッド周囲の環境では、「大変参考になった」4名、「参考になった」9名。ポータブルトイレの移乗では、「参考になった」3名、「あまり参考にならなかった」2名。歯磨き介助では、「大変参考になった」3名、「参考になった」9名。体位保持の方法では、「大変参考になった」4名、「参考になった」9名。嚥下訓練では、「参考になった」3名、「あまり参考にならなかった」1名。歩行訓練では、「大変参考になった」1名、「参考になった」2名、「あまり参考にならなかった」1名であった(表1)。

また、「援助をした際、患者様は快く受け入れてくれましたか」の設問に対し、ベッド周囲の環境では、「大変そう思う」3名、「そう思う」10名。ポータブルトイレの移乗では、「大変そう思う」1名、「そう思う」6名、「あまりそう思わない」2名、「全くそう思わない」3名。歯磨き介助では、「大変そう思う」6名、「そう思う」7名。体位保持の方法では、「大変そう思う」4名、「そう思う」9名。嚥下訓練では、「そう思う」5名、「あまりそう思わない」3名。歩行訓練では、「大変そう思う」1名、「そう思う」4名、「あまりそう思わない」4名であった(表2)。

またDVDに関する意見・感想として「スムー

表1 DVDの内容は援助の参考になりましたか

	大変参考になった	参考になった	あまり参考にならなかった	参考にならなかった
① ベッド周囲の環境	4名	9名		
② ポータブルトイレの移乗		3名	2名	
③ 歯磨き介助	3名	9名		
④ 体位保持の方法	4名	9名		
⑤ 嚥下訓練		3名	1名	
⑥ 歩行訓練	1名	2名	1名	

表2 援助をした際に患者様は快く受け入れてくれましたか

	大変そう思う	そう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
① ベッド周囲の環境	3名	10名		
② ポータブルトイレの移乗	1名	6名	2名	3名
③ 歯磨き介助	6名	7名		
④ 体位保持の方法	4名	9名		
⑤ 嚥下訓練		5名	3名	
⑥ 歩行訓練	1名	4名	4名	

ズに援助に移る事が出来た」「患者の不安を軽減出来たと思う」「安心して援助できた」「同じことをしないといけないというプレッシャー、戸惑いがあった」「リハビリ目的の転院のためもっとリハビリの様子があればよかった」などの意見があった(表3)。

VI. 考察

アンケートの集計結果から、「ベッド周囲の環境」「歯磨き介助」「体位保持の方法」の項目において、看護師と患者本人の評価が良いことがわかる。これらの項目は、この患者独特の方法であり、本人から介助内容の要望が強かった項目である。「ベッド周囲の環境」では、患者の右側に小物入れをテープで固定し、患者がよく使用する携帯電話や文字盤、ペンなどが仰臥位のままでもすぐに手が届く位置に設置したことを説明しながら撮影した。「歯磨き介助」では、まずセッティングする物品の説明をし、その後患者がスポンジブラシ、舌ブラシで口腔ケアを行い、吸い飲みで2度含漱し、口腔内の自己吸引をすること、その際に看護師はどのような介助をするのかを撮影した。「体位保持の方法」では、看護師二人が患者の両側に立ち、片方ずつ腰部に体交枕を入れ、その後臀部のあたりに浮き輪か円座を入れること、その際に患者がどのように動き、看護師がどのように介助しているのかを説明しながら撮影した。これらをDVDにする

ことで、文章や静止画では伝わりにくい患者とスタッフの動きが明確になり、情報が伝達しやすい。内容としては、患者からのケア方法に対するニーズが高く、患者独特の看護を映像情報として伝えることが、患者にとって安心できる継続看護に繋げる上でより効果的であったと考えられる。

しかし、「ポータブルトイレの移乗」「嚥下訓練」「歩行訓練」の項目については、「参考にならなかった」という意見や、「援助を患者が快く受け入れてくれたとはあまり思わない」という意見もあった。本人の右下肢を切断していることや、嚥下機能が低下しているという身体的特徴に合わせた看護方法であるが、これは一般的なリハビリや移乗介助と特に大差はなかったためと考えられる。また、「全く同じ方法で介助しなければならぬのか」というプレッシャーになってしまった」という意見があったことから、研究の協力依頼文には、DVDの内容通りの方法を強制するものではなく、適宜方法は変更しても構わないという記載はしたが、映像中にその説明を入れたりするなどの配慮をさらに行う必要があった。

アンケートにおいて、ケアの項目によっては無回答がみられた。明らかではないが、調査期間が短かったため、一部のケアは介入できておらず、回答できなかった可能性がある。DVDの送付の時期は患者の状態も変化する可能性を考

表3 DVDに対する意見

<ul style="list-style-type: none"> ・患者様の顔や様子を先に知ることができ、受け入れがスムーズにできた。 ・とても分かりやすく、ケアに入る際の参考になった。 ・含嗽の紹介が参考になった。 ・DVDを視聴してからの介入で、スムーズに援助に移ることができた。 ・こだわりが強い患者様への関わりの不安も軽減することができた。 ・転院日に夜勤を担当したが、DVDを視聴していたことで、患者様の様子や援助方法がわかり、安心して援助をすることができた。有効な伝達方法だと感じた。 ・参考になった点もあったが、DVDの内容と全く同じことをしなければならないのかというプレッシャーがあった。 ・DVDと同じことをしなければならないのかと思い、環境(部屋の広さ, 扉の位置, ナースコールの位置等)が違うため、どう支えていくのか戸惑いがあった。 ・転院先が圧迫感を持たず、受け入れられるような配慮がほしい(現状紹介のような)。 ・病院毎に違う部分があるので、DVD通りにいかないところがあった。 ・DVDでの情報不足は、患者様がコミュニケーションを取れる方であったため、援助するにあたり助けられた場面も多かった。 ・もう少し早めに情報をもらえていたら、物品や部屋の準備がしやすかった。 ・リハビリが目的なので、リハビリの様子がもっとあれば在宅に向けて有効であったと思う。 ・細かい処置について不明な点が多くあった(P-TEGの処置, 義足の装着方法)。
--

慮しながら作成し、看護サマリーやリハビリサマリーの内容とともに、郵送時期を検討する必要がある。

また、今回の転院はリハビリ目的の転院であった。リハビリについては書面のサマリーがあり、義足の装着について写真付きの資料を転院前に送付していたが、義足の装着方法やリハビリの詳細も映像としてほしかったとの意見もあった。そのため、映像情報が効果的であったこと、またリハビリに関して詳細な映像があればさらに効果的であったことが予想される。また、DVDの時間が長かったという意見はなかった。スタッフが仕事の合間にDVDを視聴できるよう各項目を1.2分で作成し、計10分以内に収まるよう作成したことや、DVDの内容が多くなることを避けて項目を絞ったことが、効果的であったと考えられる。期間的に可能であれば事前に転院先に文章でサマリーを郵送し、転院先のスタッフの要望を確認した上で項目を検討することで、より転院先の要望に沿った伝達手段となり、継続看護に役立てることができると考えられる。

今回アンケート調査は患者には実施せず、医療スタッフのみに実施した。患者に対するアンケート調査を実施する場合、転院先のケアの評価になってしまう可能性が危惧されるため実施しなかったが、後日患者を訪問した際に「DVD

のおかげでスムーズに入院することができました。」との意見を聞くことができた。そのため、DVDの効果を評価するにあたり患者に対するアンケートも検討する必要がある。また、本研究は1事例のみであるため、今回の結果をふまえ今後の継続看護に活かしていきたい。

VII. 結論

気管切開をしていることでコミュニケーションがスムーズに行えず、また看護師間で看護方法が違うことにストレスを大きく感じる患者において、日々のケア内容を映像情報として転院先に提供することは、ケア内容の伝達を有効に行うことができ、継続看護に役立てることができた。その際、映像として作成するケア項目は、患者のケア方法に対するニーズが高く、患者独特のケアを選択することが、より効果的であった。また、転院の目的に合わせて、ケア項目を決定することも、効果的な伝達手段となると考えられる。

参考文献

- 1) 松原功明, 宮地茂, 泉孝嗣, 他: 局所麻酔下に脳神経血管内治療を受ける患者の術中不安軽減に対するシミュレーションDVDの有効性, JNET, 6 (3), 161-162, 2012.